

芸豪烈伝その19

みかど
三門お染とめ

「人を愛することが幸せになる道です」

写真・森 幸一ほか 文・おさだ源兵衛



みかど おそめ 本名・江口素女子(そめこ)。大正14年(1925)、東京の品川生まれ。二代・広沢虎造にシビレて浪曲にあこがれ、18歳で三門博に入門。趣味は民謡、マージャン、パチンコ。性格は「強情で男みたいよ」。好きな言葉は「心」。「浪曲は庶民の怒りや悲しみ、苦しみが表現できることが魅力です」浪曲は、やればやるほど難しい。死ぬまで勉強ですわね」

お染はイタリア語でもオーソメミヨ(お染みよ)と歌われる?! 芸達者だ。芸能生活50年のキャリアを誇るベテランは恋と芸に身を燃やし、人生の幾山河を越えてきた。
日本いちの幸せ者を自認する、お染に「幸せになる極意」を聞いてみた。
江戸っ子は五月の鯉の吹き流し 口先ばかりでハラワタはなし

お染師は口調は歯切れがよく、伝法なアネゴ肌で、いわゆる竹を割ったような気性だ。

「一歩ひけばいいのに言ってしまうんですよ、こうだと思つとね。あとで立場が悪くなるんですよ。頼まれるとイヤといえない性分なんです」

「新弟子の楽屋うちの礼儀作法は、われながら口うるさいですよ。お局おぼさまですよ。ほほほほ。」

若い弟子が入って来ただけじゃあ困るんです。一人の師匠の弟子でなく浪曲全体の宝なんですから」

いうことに一本すじが通っている。

芸も江戸前のスツキリして上品で、口あたりが良くしてお腹にもたれない。

「でも、三門節はあっさりして物足りないというお客さんもいますね」

「男の花道」「文七元結」「玉の入船」など代表作は数々あるが極めつけはやはり師匠ゆずりの「唄入り観音経」だ。さあ、読者の皆さんも一緒に。ネンピカンノンリキ、トウジンダンダンネ。幸せになれる予感がしますね。

お染師は昨年の暮れから体調を崩していたが最近、復調した。

「私は声帯が弱くてノドをつぶして、アームも声でなくなるんです。いろいろ、皆さんにご心配をかけましたがノドも治りました。8月か9月に、また木馬亭に出演しますので、どうぞよろしく」



最愛の夫、江口紘三郎氏と。昭和50年、ハワイにて。「若いころ、とっつきあいのケンカをしました。私が向かっていくんです。紘ちゃんが私を投げ飛ばすんです。いまとなれば、うれしい思い出です」

芸道に邁進してきたお染師が、もうひとつ命をかけたもの、それは夫への愛だった。
昭和24年に7歳というえの広沢龍造と結婚する。
「いい男でした。男前で気っぶがよくて無駄口をきかず情けがあつて。あのひとと所帯が持てて私は幸福でしたね。生き字引みたいなのに、なんでも知つていて私の人生の羅針盤でした」
広沢龍造は身体をこわし江口紘三郎（えぐち・こうざぶろう）の名前で浪曲作家として活躍する。
結婚生活33年、江口紘三郎氏は昭和56年に62歳で、あの世の人となる。肝臓ガンだった。
「遺体を荼毘にふすときに、私も一緒にカマに入ろうとしたの、紘ちゃんが淋しいだろうと思つて。周りが私をはがいて締めにして、思い止まらせてくれたんですけれどね。」

あの頃は1週間で10キロやせました」
この取材は浅草の日本浪曲協会の事務所でおこない、その場にはたまたま東家三楽と富士琴路の両師がいた。
琴路「江口さんは俳優の小林桂樹に似た美男子で、二人は絵に描いたような美男美女のオシドリ夫婦だったわよねえ。うらやましかったわ」
三楽「そんなにハンサムなら、女のことで、だいぶ苦労したんだろ」
お染「結婚前はそんな心配もしたけどそんなことは、なかったのよ」
三楽「だけど今頃は天国で、女を作つてんじやねえか」
お染「それでもいいわよ。それはツナギだから私は気にしないわ」
幽霊と真実の愛は噂だけで、この世には存在しないと考えていた当方にとつては嬉しいシヨックだった。夫婦の間に愛があるなんて?！
「舞台に立つ前は紘ちゃんの写真を帯の間にいれて、どうぞうまくいきますようにと祈るんですよ」
「私が死んだら私のお墓に、紘ちゃんの手紙を入れてもらうの。」
人を心底、愛することが自分も幸せになる道なんですね。
私は七たび生まれ変わっても紘ちゃんの奥さんになりたい」
七生報国ならぬ七生報愛か。お染師は愛の戦士なのだ。
ここで急いで付け加えると、お染師



「三門節は裏声が身上ですから声帯の弱い私は、ちよつと悲しいんです。舞台では背筋を伸ばしてピンとしますが舞台度胸はないですね。女流はフケるとキタナクなりますから、あと2、3年で引退ですかね」（いいや、まだまだやれるぞ、と客の声おし）
は、ご亭主のことで得々と自慢げに話したわけでなく、当方の質問に慎重深く控えめに答えていたのです。
江口紘三郎氏との間には子供はなかったが、江口氏の先妻の子供である泉ピン子を実の子供以上に可愛がった。
「ピン子も、いまは大変な時期だけどピン子のご亭主を愛していて幸せなんだから、あれはあれでいいんですよ」
江口氏はいまも、お染師の胸に生きている。
「来年、紘ちゃんの十七回忌を済ませれば私の役目は終わりですよ」
そんな気弱なことをいわずに、もう一花も二花を咲かせてほしい。三門節の本格的な復活のためにも。
今回は芸の話には触れられなかったが「芸は人なり」でお許し下さい。

浪曲...

19
52

これほどすばらしい芸は他にはないと
思います。
浪曲家の皆さん...頑張ってください。
多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉